

猛火と黒煙が覆う 幣舞橋をくぐり抜け疎開する

岡 雄一

当時、私は東栄国民学校の六年生で、我が家は厳島神社の右側高台を一望する米町一丁目の官舎に住んでおりました。空襲の怖さと疎開途中に見た釧路市内の戦災状況を回想してみます。

低空飛行と機銃の響きに 生き地獄の様相だ

何時ものように共同水道へ水汲みに出た昭和二十年七月十四日の午前六時は、霧がかかり、聞きなれない飛行機の爆音に演習でもしているものと感じた。すると、霧の切れ間から三機の飛行機が今の JR 釧路車輛所の上空を旋回し急降下を始めた。とっさに敵のグラマン機と感じたが、マンガで覚えたのが釧路空襲で、「現実遭遇」したときの驚きと恐ろしさは言葉に表すことが出来ない。「来るべき時が来た。敵機来襲！！」と無我夢中で父に知らせた後、けたたましい空襲警報のサイレンが鳴り響き、防空頭巾をかぶり母と弟（国民学校五年生）と三人で防空壕へ一目散に逃げ込んだ。すると、グラマン機の低空飛行の金属音とともに、「ヒューン。バチッ、バチッ」という機銃掃射のすぐそばに当たる不気味な音がして、弾が突き抜け命が無いと思った。続いて、突然大きな轟音がして爆風で壕の扉が吹き飛び、身体が締め付けられ耳鳴りが「キーン」とした。私と弟がガタガタと震えていると、母が一生懸命に呪文を唱えていた。グラマン機が飛び交う爆音に、全く生命が縮む「生き地獄」であった。

空襲は二波まで続き 市内は猛火と煙が立ちのぼる

空襲警報が解除され辺りを見渡すと、南埠頭岸壁に停泊していた艦船の一隻が機銃を浴び爆雷破裂で後部が沈んでいたり、すぐ隣の大きな木造建ての造船所が破壊され、火

炎を起こし黒い煙がモウモウと上がっていた。市内も大火災が発生し、猛火と煙が上がっているのが見えた。昼食が済んだ午後二時半に再び爆音が響き、もっと安全な場所へと、土手を素掘りした米町展望台下の高さ三メートル、奥行き三十メートルの壕に避難しようとしたとき、水面貯木場の上空にグラマン機が見え、十二機まで数えたが、恐ろしくなり慌てて駆け込んだ。すると、壕の手前三十メートルと五十メートルほどのところに、奇妙な音とともに爆弾が落とされた。物凄い炸裂による地響きと爆風の激しさは、地下壕でも身体にかなりの振動として伝わるのを知ったが、そこは建物疎開により空き地となっていたため被害と負傷者がいないのは幸いであった。爆弾による凹地は直径五メートル、深さ一、五メートルもあり、近くに機関銃や部品が落ちていた。この時、日本軍の交戦は武官府（現八ツ浪）と艦船の機関銃の音が散発的に聞こえ心細く感じた。

集団疎開で 米町から岩保木水門まで夜通し歩く

空襲が止んだ午後五時になっても、造船所からは火の粉と黒煙が上がっており、市内を見渡しても至るところで延焼が続いていた。次の空襲への不安と身の安全を考え、父の発案で、家族と近所の夫人八人が疎開することになり、官舎を午後六時に出発した。幣舞橋に差しかかると猛火と煙に覆われ一帯は薄暗く、爆弾の穴に注意しながら母の角巻を弟と頭からスッポリかぶりここを命がけでくぐり抜け、消防署の横通り（現 M00 前）から釧路車輛所まで来ると、一層炎が大きく見え被害が甚大であることを感じた。トンケシから競馬場（現駒場町）へと近道をし、鳥取橋を過ぎ父が仕事をしていた釧路川を横目に見ながら以前住んでいた治水官舎の前を通り、途中の休憩や会話もなく、ただ後方の火の明かりを見続け、ひたすら真夜中を歩き通した。薄暗くなった午前二時半には目的地の岩保木水門にたどり着いた。水門管理人は不在であったが全員で一夜を過ごすと、朝には管理人が現れ、前日の朝六時に貨物列車が銃撃され官舎も被弾したことがわかった。私達は少し離れた農家に疎開した。

釧路空襲の体験者として 平和な社会へ語り継ごう

疎開から一ヶ月後の八月十五日、釧路へ帰る途中に東釧路駅まで来ると、駅員から天皇陛下のお言葉があると言われ、そこで「玉音放送」を聞いた。戦争が終わることを知り、当時客車があった釧路臨港鉄道に乗り家へ帰った。市内が爆撃され火の海と化した跡は焼け野原となっており、多くの市民が亡くなったと聞いた。末広界限を見た時、丸三鶴屋の窓ガラスが飴のように溶けて流れ、旭国民学校の集合煙筒がぼつんと立っていた。そのあまりの悲惨さに、「これが戦争か・・・」との思いを強く持った。終戦五十年を迎え、この釧路空襲の記憶を永く語り継いでいきたいと思う。